



通信



自分と相手との境界線をなくそう！

VOL.14

令和2年10月1日

作成：長岡 正宏



植芝家の奥津城(京都府綾部) 撮影:長岡



母ゆきの墓



長男武盛次男国治の墓

合気の旅(植芝家の奥津城を訪ねて)
 前回、「植芝塾」開講100周年と記したが順風満帆でもなかった。100年前の大正9年は

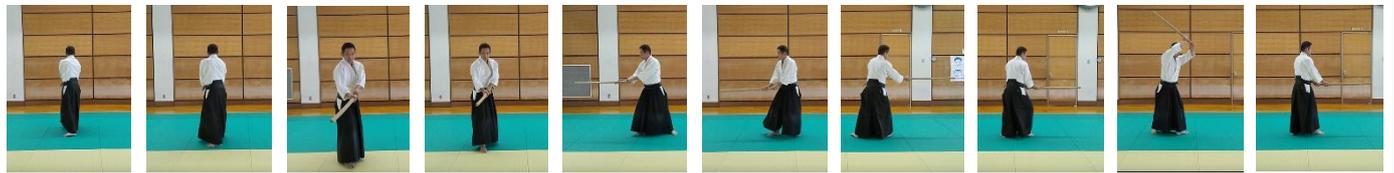
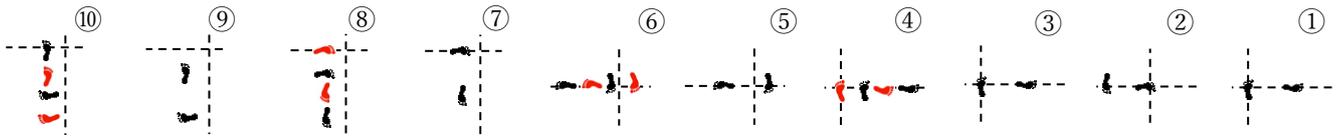
- ・一月二日 父与六死去
- ・一月四日 北海道白滝より和歌山へ帰郷
- ・春頃に一家六人が京都府綾部へ移住
- ・八月二十三日長男武盛(三歳)死去
- ・九月十一日次男国治(一歳)死去

翌年二月に第一次大本弾圧事件が起こる。開祖にとって波乱の一年だったに違いない。その後のポイントラ事件、第二次大本事件など艱難辛苦の連続だ。だが開祖は自分自身をしっかり見据えて、自分の力で人生を切り開かれていったのではないだろうか。開祖の母ゆきは、移住二年後の大正十一年七月七日(七十一歳)綾部で他界された。合掌し天津祝詞をお唱えして「植芝家の奥津城」を後にした。

【木剣を持って自主稽古しよう！ ～四方突き～】

切り下ろしはすべて右半身。右半身の状態のまま「送り足」で突く！④⑥⑧⑩は突きの状態。運足図、写真が小さくて申し訳ない。拡大して見て頂きたい。

※送り足：右足が前へ出たら、すぐに左足を右足に引き付ける。 ※突きをするから元の位置に戻らない。縦横点線は立ち位置の目安である。



～ワンポイントアドバイス～

《右半身での突きの場合》

剣と左腕が真っ直ぐになるようにして突く！腕で突くのではなく体で突くためだ！刃は左斜め45度下になる。



道心探求

合気道を上達させるための要素は色々である。中でも、三つの力が必要ではないかと思っている。力といっても筋力的なパワーではない。それは、「感じる力」「信じる力」「行動する力」だ。人は視覚からの情報に集中してしまいがちだが、案外いい加減なものだ。見ているようで見ていないことが多い。しかし、体で感じたことは真実に非常に近いと思う。「感じる力」を鍛えたい。次に、自分の能力、合気道の素晴らしさを信じて、必要だ。何事も「信じる力」がなければ、続かないし、自分の可能性を閉じてしまう。また、口で良いことを言っても体で表現できなければ意味がない。行動し体を動かすことだ。そして、継続することだ。それが「行動する力」であり修行である。この三つの力は、すべて「心」の在り方でもある。自分の心をコントロールできないければ、技をコントロールすることはできない。心の置き所を変えるだけでも技は変わる。合気道の上達は「心」次第かもしれない。それは、全てのことにおいて言えることだろう。

～開祖の言葉～



相手の目を見てはいけない。目に心を吸収されてしまう。相手の剣を見てはいけない、剣に気が捉われてしまう。相手を見てはいけない、相手の気に吸収されてしまうからだ。真の武とは相手の全貌を吸収してしまう引力の錬磨である。だからわたしはこのまま立っとればいいんじゃない。「武産合気」より